

都市のORGANON

—現代建築への告別の詩—

これまでの私にとって、卒業設計とは編集者の言葉を借りれば「ひたすら遠のいていく原点」としての表現であったと思う。しかしまだその「遠のいた」という距離まで到達していないので、もう少し遠のかなければならぬだろう。そしていつか再び、ひたすら「恥かしながら」という思いを込めながら帰って行く時が、私にとってやってくるかどうかは定かたではない。しかし私にとって、卒業設計が少くとも近代建築とそこから非才な私が垣間見ることができる現代建築への告別の詩（少しキザだが）といってもいいことは確実であったように思う。

そして建築に告別の詩を送り、以来これまで日本の漁村の研究に熱中してきた私が、今なにををしているのかも明らかにしなければならぬというこの企画は、なんと残酷なものであることか。しかしかくいう私も、この企画に乗った以上いわばマゾヒスティックな趣味があるといえるのかも知れないのだが。

冗談はさておき、どうして卒業の時点で建築に告別したのかという当時の状況を正確に思い出すことは不可能に近いが、大学2年から4年にかけての時期は、数多くの建築家や思想家の影響をまともに受けつつ、自分を見失うまいとただひたすらに「何か」を画きまくって行くという、いわば台風の中にまき込まれたような時代であった。そして11月頃、卒業論文を書き上げた時分にある種の「全体的直観」によって、私は名誉ある村野賞もあきらめるといふ決意のもとに、3週間で仕上げたのが私の卒業設計である。その作品については図版を見ていただき、

ここで私が学生時代に影響を受けた人々との出会いのようなものを述べ、そしてどのような手法で、何を託して線を引いたかを述べて、私の「卒業設計」をご明察いただくより他はない。

F・L・ライトは、私にとって、最初の建築との出会いであった。高校3年の時ある建築家から見せられたライトの作品の数々の美しいカラー写真によって、私は建築へ進む決心をいよいよ固くした。

その後大学2年後半から4年前半までの2年間は、黒川紀章氏のアトリエで様々なコンペや計画案などを手伝いながら、氏からは建築、思想、行動など実に数多くのことを学ぶことになった。一方大学の内では、今和次郎先生の姿を時々拝見しながら、同時にその名著「日本の民家」などから日本の建築家の在り様といったものを学ぶことになった。さらに今井兼次先生の有名なガウディ建築の講義は、一番前で欠かさず聴講したように思う。

そして先生は時々熱演のあまり、口から泡を飛ばされていた。またその頃の好きなベニス・ピエンナルの日本館やヴイラ・クツカーなどの作品の印象と共に、探検家・吉阪隆正の姿をいつも後から遠慮がちに眺めていた。大学祭・建築展の委員として評論家・栗田勇氏に講演をお願いしようとして出かけて以来は、氏のガウディ建築論や日本の空間論に強く魅了されることになった。また黒川氏のアトリ

エに通っていた頃、氏を通して教えられたオランダのA・V・アイクやアフリカ・モザンビークのA・D・ゲデスなどの作品に熱狂し、その作品をひたすら真似ようとしたこともあった。そしてこうした一種の熱病状態を決定的にしてしまったのが、A・V・アイクが強い影響を受けたといわれるイスラエルの思想家M・ブーバーの哲学であった。

彼の名著「孤独と愛」や「もう一つの社会主義」などに示された、「対話」による世界構築のイメージは、10数年前に私の世界観を全く塗りかえてしまったといっても良いものであり、現在でも私のゼミナールの必読文献のひとつとなっている。たとえば吉阪先生の都市計画のリポートも、全部ブーバーの思想と言葉で埋めてしまったこともあった。シオニスト、神秘主義者、実存主義者、ユダヤ主義者、マルクス主義者、アナキストなど彼への評価は実に多様だが、ブーバーの思想と言語は私にとって、それまでのどんな建築家の思想や作品よりもはるかに明快

に「空間・世界のイメージ」を教えてくれるものであった。それは昨今の俗物政治家たちが好んで使う「対話と参加」などや、俗流コミュニケーションなどは全く無縁な、毅然とした「高み」である。幻の建築家J・B・ピラネージの絵が、ヨーロッパ空間の「崩壊感覚」を鋭く提示するものであるとすれば、ブーバーの

思想と言語は同じ西側の一角から、新しい「空間構築」を呼びかけるものではないのか。訳者野口啓祐氏はこう述べている。「……40年前におけるデカルトの「方法序説」が近代的思想の基礎となったと同様に、ブーバーの「われとなんじ」の思想は」来るべき新時代のいしずえになるといっても過言ではあるまい。」

ここであまり長くブーバーの思想に停ることはできないが、少し引用してみよう。(註・一)

「われは、われだけでは存在し得ない。存在するのは、われーなんじにおけるわれか、われーそれにおけるわれのみである。」

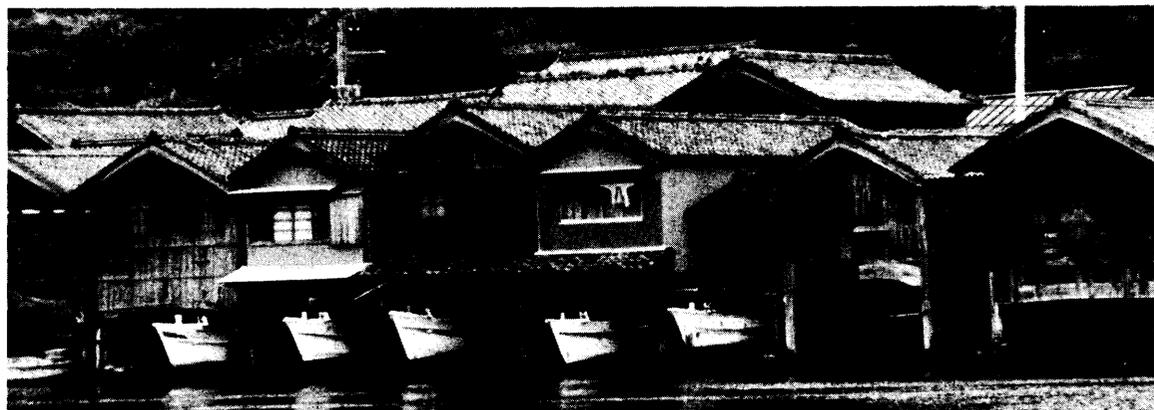
「こうして、この木に属するすべての事柄は、まさにわれーなんじの關係にふくまれてしまう。木の形も構造も、色も、化学的組織も、自然力や星との交りも、すべてが単一なる全体のうちにひそんでしまうのである。」

「わたしは、自分の精神にあらわれたかたちを客観的に経験したり、記述したりすることができない。わたしは、ただそれを体現することができただけである。それにもかかわらず、もしもわたしが、われーなんじの關係のまばゆい光のうちにそれを眺めるならば、経験的世界のいかなるものよりもはつきりと、そのかたちを認めることができるであろう。」

「行動する」とは「作り出す」ということである。「作り出す」とは「見出す」ということである。「形づくる」とは「発見する」ということである。わたしがあつたものを「作る」とは、わたしがそれを「あらわにする」ということである。」



⑩ 周辺・牛島絵図

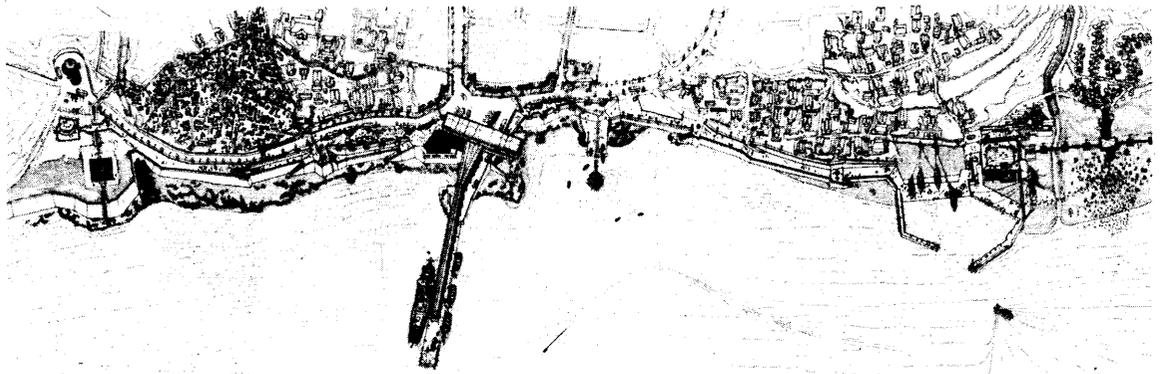


⑪ 丹後伊根浦の舟小屋

とてもこの程度の引用では全くどうにもならないが、とにかく私にとって建築は急に色あせたものになってしまった。機能主義建築論はいうまでもなく、その否定すらも私には、日暮れて道遠し」という感じであった。むしろ私の中に胚胎しつつある「空間・世界のイメージ」を、現実の世界の中に探っていくことの方が早道ではないのか。そのような「建築家が居ても良いのではないか。建築を「作ること」の集積の行きつく先は、世界によって建築が「作られること」であるはずだ。なぜなら「世界」はすでに在るのだから……。私達のできることは、未だに在らざる世界へ向かってその空隙を少しずつ埋めて行くことではない。それ以来私の辞書には、自我、主体性、創作といった言葉はなくなってしまったといつてよい。建築家が世界を創作する主体などでは全くなく、むしろ建築や建築家が世界内と歴史に客体化されるという地平である。

したがって卒業設計とは、私にとって建築家としての主体性の放棄宣言であり、また「作るもの」がどう集積して、どのようなメカニズムの中で「作られるもの」に転化し得るのかを、図面という表現手段を用いて実験することであった。そのためにA・ブルトンのシニョールリズムの基本的手法ともいえるべき「オートマテイスム」を借用し、「作るもの」をいわば自動表現方式に乗せて、「作られるもの」に転化させようとした。つまり「作るもの」としての単体の集合によってある種の「世界」を表現し、そこから自動的に「作るもの」を「作られるもの」へ転化させようという試みである。手法としてはまず「都市のオルガノン」と称される建築らしき単体を画き出し、その図面をC・Hに縮小してそれを繋ぎ合せたものを再び撮影して都市像をあぶり出すというものであった。そしてあぶり出された都市像は、再び単体としての都市のオルガノンへオーバーラップされて行くはずのものであった。しかもこの都市のオルガノンをできるだけ非主体的ないし没主体的に画き出すために、その形態の個別的要素はすべて機械工学におけるジェットエンジンなどの図面から借りることにしたのである。しかしフリーハンドによらないこの図面は、たとえば今井先生からは大変に辛い点をいただくことになってしまったのは、私の不徳のいたす所であったといえるだろう。

またここで都市のオルガノンを説明するために、卒業設計の最後に書かれている当時の私の誠に負いつた稚拙な文章を「恥かしながら」引用しよう。「部分が相互作用により全体の目的の表現に道具（オルガニクス）とするというアリストテレスの規定は意味が深い。そして有機的という規定はヴァイトルヴィウス以来の様々な規定にもまして偽ライオト主義者にとって皮肉なことには機械というものを素直に表現している……都市文明にとって計画は今や民主主義を盲信し自らの主体性を売ったところの無気力化したファシズムに転化しようとしている。都市はこれからも都市計画と建築を超えたところに存在しつづけるであろう。自己否定と共にある。共存しつづける」という全体の崇



⑫ 伊豆大島元町絵図

高な目的に我々は参加している……そして現代の対話法とは真の意味でのORGANON（科学的研究の原則）を持たなければならぬ。そこでは多レベルの機能は常に一つとして提出されているのである。私は私の卒業設計を、都市のORGANONと名付けよう。

今こうして引用して見ると何だか分ったようでも分らない文章であるが、ともかくこうして私は現代建築に告別することになったのである。

またこの卒業設計にとりかかる前に、私は建築に告別する決心を固めるために、新しい「空間・世界」を求めて京都に1ヶ月近く滞在し、各所の杜寺や町並を歩き廻ることになった。しかし2・3の興味ある場所があったものの意外にもジャズ喫茶以外に私を満足させてくれる場所はなく、趣味のいい文化人にあふれる一方の愚劣な歴史観光に満ちた京都に失望して大学へ戻ることになった。そして行き場のない絶望的な気持をかかえながら大学院へ進むことになったが、その後友人の進めて大火に遇った伊豆大島の復興計画に吉阪グループの一員として参加することになり、建築に告別した私は新たな「空間・世界」と出会うことになったのである。

またそのころ私は週刊雑誌の一枚の写真に目を釘付けされることになった。それは以後の私の漁村研究を決定づけた京都府、丹後伊根浦の一枚の写真であったが、取るものもとりあえず伊根に駆けつけた私は、そこで再びそして決定的に、打ちのめされてしまったのである。小さな湾内の波打際に2階建の舟小屋が所狭しと並ぶその光景を前に、私は日本にもこんな素晴らしい「空間・世界」があったのかという深い感慨にとりつかれて、旅館での夜もほとんど寝ることもできなかつたことを思い出す。それはほとんどオートマトン（自動機）といつても良いほどの見事な記憶素子と論理回路を内在させている世界であった。記憶素子とは漁師であり漁家であり、論理回路とはエトス（共同体意志）であり、インプットとしての母なる海は土地を媒介として見事な集落景観（アウトプット）を生み出してきたといえるだろう。しかし伊根浦のような漁村がオートマトンであるというのはいささか荒唐のそしりもまぬがれないので、ここで少

生来私はどうやら熱病に罹りやすい性質であるらしい。伊豆大島で見た波浮の港や泉津集落や元町の共同墓地などの前で、私は息を呑みほとんど立ちつくしてしまっていた。そこに在る空間とは「作るもの」の集合などでは全くなく、ひとつの「世界」の中にひとつひとつの建物（建築ではなく）が作られて、支えられて

いるという「空間の構造」らしいものを皮膚感覚的に読みとることのできる世界であった。以来2年間復興計画のための基礎調査、研究としての意味も含めての漁村あるいは集落研究らしきものが吉阪グループの他のメンバーとともにこなされることになった。そしてそれが一応の終りを告げるころ私達は「発見的方法」（註・2）ともいえるべき全く新しい方法論が存在し得ることを確信することになった。

し論理的にその空間形成のメカニズム（空間構造）を整理してみよう。（註・3）この伊根浦における見事な舟小屋の問題は、単体としてあるいは形態の問題からは十分に認識されることはできない。それらは集合としてあるいは形態（現象）を支える土地（実体）などの問題を通してはじめて理解されるものである。即ち図を見ては理解されるように、完全に個人または家のものとしての舟小屋が同時に集団としてあるいは集落としての集合を前提として成立しているのである。つまり個々の舟小屋とは、ある集まり（ひとつの空間・世界）を可能にする形態として存在し、一方集落としてのひとつの世界はその中に、個々の舟小屋を成立させ得る基本的形式を含むものとして存在するという、個と集合空間の弁証法的なメカニズムを見ることができるのである。先に述べた言葉でいえば「作るもの」としての舟小屋は同時に、ひとつの世界の中で、作られるもの」として作られるのである。そしてかつてはこの湾内では、カガリ火を焚いて村人総出で鯨を捕るといふ劇的空間が開かれたという。まさに近代社会が失って久しい「空間・世界」が、今日なお確実に再生産されているのである。

漁村は土地が狭いから密集するなどという現象しか見ない俗流地理学的知識が、いかに我々の目を濁らせてきたことか。現象（形態）の背後には、それを支える実体的条件があり、その実体的規定によって漁村空間は高密度なものとなる。そして「作るもの」が「作られるもの」に転化し得る実体的条件として、集落の土

地ないし土地割形式が存在するのである。伊根浦でいえば、母屋と舟小屋という関係つまり一定の居住単位形式を含むものとしての短冊型宅地割こそが、集合を前提とするあるいは集合によって規定される形式に他ならないのである。ここに「世界内で客体化される建築」の見事な論理モデルが成立することになる。そしてここでは詳しく述べることはできないが、この短冊型集合の論理はまた本質的条件としての漁業生産（海とのかかわり）の論理によって支えられあるいは規定されることになるのである。昨今こうした漁村は建築ジャーナリズムを賑わすデザイン・サーベイという不可思議な分野にもよく登場するが、こうした形態を支える土地や海を見ないつまり空間形成のメカニズムを看過した方法論で、いくら平面プランの特集やディテールを探っても、その集合の秘密を解き明かすことができないことはすでに明らかであろう。まして観光気分分て出かけた外国の集落においておや、である。

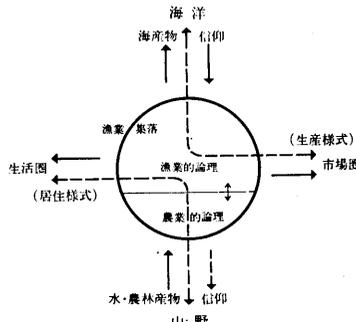
思えば我々の目はすっかり濁らされてしまったといえるだろう。こうした時、初心に帰ることが肝心のように思われる。このきわめて人間的な要求にどうしたらものが良く見えるかという点について、たとえばR・デカルトは発見術書ともいわれる「精神指導の規則」(註・4)の中でこう述べている。規則第12・最後に、悟性、想像力、感覚、記憶の与えるすべての助力を用いるべきである。或いは単純な命題を判明に直観するために、……或いはそのように互いに比較すべき事物を発見するために、つまり人間の用いうる

いかなる手段をも、閉却してはならないのである。そしてまた、規則第14・上の問題を物体の實在的延長に移し、あらゆる凶形(figure)によってすべてを想像に呈示すべきである。なぜなら、かくすればそれを以前より遙か判明に悟性は覚知するであろうから。なんとみずみずしい原則(オルガノン)であることか。しかし人間のな全ての能力から、ある部分のみを拡大してきた近代科学はもはや完全に破綻し世界は今新たな予告を求めている。

科学と詩学を論じて高内壮介はいう。(註・5)「……存在論という如き哲学が、数学を指導することなどあり得ないと思ふだろうが、僕はそうは思わない。存在論からひき出されるものも重要な結論は、へ見る」ということである。どうしたものがよく見えるかという問いかけこそ、今までの学会組織を瓦解させる指導理念になろう。……ともかくそういう存在へのまえもどりが我が国に於ても一九六〇年をすぎると、もともと実力のある数学者によって唱えはじめられたのである。湯川秀樹博士の「同定理論」小平邦彦博士の「発見の論理」佐藤幹夫博士の「代数解析への帰還」そして北川敏男博士の「営存の論理」などは、それぞれの立場の相違にかかわらず、何等かの意味で創造の主観性からの脱出をめざしているかに見える。創作は主観的であつても、真の創造は授与的である。創造の授与性こそ、創造の秘密だ。真の創造は構成ではなく、対象からの発見なのだ。……少し引用が長くなりすぎたが、私の現代建築への告別と私たちの伊豆大島から

始まった発見的方法の展開とその漁村研究への応用は、その後全国各地において試験に立たされることになった。都市において、山村において、農村において、漁村において、島において。そしてそれはまだ充分なものにはなっていないが、新たな空間・世界が存在することについてだけは確信がある。そもそも空間計画とは、認識論的にいえばまだ隠された世界の「合理と自律」を発見し、自己を空間・世界に客体化する条件を見出し、いまだあらざる世界の「新たな顕現」を決断することに他ならない。

新たな空間創造の原則(オルガノン)を獲得すべき時代が始まってすでに久しい。そしてそれはまた「現代建築・第三の世代」(註・6)などとも全く次元を異にする新たな地平からすでに始まっている。私達にとってそれは伊豆大島であり伊根浦であり、沖繩であった。そこは悠久たる黒潮に洗われる空間・世界であり、また黒潮のふるさとともいうべきニライ・カナイ(あらゆるものの根源の海の国)であるのかも知れない。(註・7)



⑬ 漁村の構造